

武本 京子・神谷 舞・佐野 美咲

「イメージ奏法」による音楽の映像化の理論と実践

武本京子が提唱した「イメージ奏法」とは、音楽を「言葉、色、表現曲線、絵、映像」などで視覚化した「イメージ楽譜」や「イメージ映像」で音楽の内面を可視化する方法である。その結果、心の中に湧いてくる感情のパワーを客観的に捉え、そのパワーの方向性や具体的奏法を知覚化し視聴覚融合で演奏するピアノ演奏法 & 教育法である。

1. 「イメージ奏法」を行わない段階での問題点

①どのような曲なのか知ろうとしない。②表現したい世界をどのようなタッチで、どのような息づかいで弾いていいのかわからない。③ひとつひとつの音、フレーズを見落としてしまう。④全体の山が見えず、どこへ向かうべきなのかわからず弾いてしまう。⑤平面的な演奏、説得力のない演奏をしてしまう。⑥表現が曖昧で確立しない。

2. 「イメージ奏法」による映像化の理論

1) 「イメージ楽譜」作成

楽曲のイメージを映像化するにあたって演奏者は「イメージ楽譜」を作成する。①ひとつひとつの音を無駄にせず、どのように演奏したいか、どのように音を響かせたいか考えられる。②譜読みしている段階で、全体の流れが把握する。③自分が、どこを無意識で弾いてしまっているかに気づくことができる。④現段階で自分が何を考え、どのように感じているのかを残すことができ、それをみて何度もイメージを再構築していくことができる。⑤「表現曲線」によって、音楽の向きや広がり、気迫の込め方まで視覚化できることで、演奏時の奏法へとつながる。⑥精神的にも落ち着いて、ひとつひとつを思い浮かべながら演奏することができる。

2) 「イメージ映像」作成

そして作成者自身が「イメージ楽譜」から導き出される画像を選択し、「イメージ映像」を制作する。イメージした色や情景、例えば青色・水色で着色された部分は空・海などのそこから連想されるものもあれば悲しみ・落ち着きなどの感情面である場合もある。楽曲のイメージや物語、さらに言えば音色づくり出すタッチに沿って、画像が切り替わるアニメーションにかける時間を思考していく。

映像に記載する「言葉」に関しては自然な流れで、かつ主張しすぎないようにする。作成していく中で、繋がりにくいものを

削除し、また画像等を追加することもある。映像の作成は作曲者の思いや意図の解釈をより具現化させるために行う。そして、楽譜上の平面だけでは表せられない、音楽の醸し出す立体的な空間を盛り上げることができる。そして音色をつくり出すために必要な時間はどのくらいかかるのか、息づかいに意識が向き、さらには、楽譜の中の平面的な世界だけでなく、前後左右上下全ての方向への響きや音楽的空間をつくり出す。それらを何度も繰り返すことによって、音楽は洗練されてゆき、身体全てをつかって、色々なことを感じて演奏するようになる。

演奏者の立場から楽曲分析をし、映像作成をする過程で演奏者の心にどのような変化が生まれるのか、イメージの映像化がもたらす演奏法への影響、タッチや音色、表現の変化、また音楽の受け止め方の変化の結果を以下の楽曲を挙げ映像化の理論と実践のデモンストレーションを行なう。

3. 映像化のデモンストレーション

1) リスト「2つの伝説」の映像化

宗教的題材である聖人の伝説を扱った宗教音楽で第1曲「小鳥に説教するアッシジの聖フランチェスコ」は、たんなる鳥の描写ではない。第2曲「波を渡るパオラの聖フランチェスコ」もまた、波の音型を用いて荒れ狂う海を表現しているが、物語そのものを表現しようとしたわけではない。この伝説の「精神的動機」を「イメージ奏法」で映像化し、聖人のエピソードだけでとどまらない表現を試みる。

2) ショパン「幻想曲」の映像化

幻想曲が作曲された当時のショパンはパリで音楽家として成功し、華やかな生活を送っていたが、表向きの華やかさとは裏腹に、ショパンの心はいつも祖国ポーランドにあった。幻想曲は、暗く重い葬送行進曲の雰囲気始まり、当時の悲劇的な祖国を表現しているようだ。何度ももがき苦しみながらも前へ前へと進むとする、祖国への想いの溢れ出た、ショパンの心の叫びを「イメージ奏法」で表現を試みる。

発表者：武本 京子（ピアノ／愛知教育大学）

神谷 舞（ピアノ／愛知教育大学院生）

佐野 美咲（ピアノ／愛知教育大学院生）

司会者：似内裕美子（声楽・音楽教育／和歌山市立商業高等学校）